

# 屋根裏部屋 の 哲学者

黒川 文



[www.comipo.com](http://www.comipo.com)



# 目次

1. 特高警察	
1. <b>特高警察</b> .....	3
2. 昭和恐慌	
2. <b>昭和恐慌</b> .....	11
3. 下宿生	
3. <b>下宿生</b> .....	17
4. 屋根裏部屋	
4. <b>屋根裏部屋</b> .....	25
5. 松本梅子	
5. <b>松本梅子</b> .....	33
6. 航空便	
6. <b>航空便</b> .....	37
7. エスケイプ	
7. <b>エスケイプ</b> .....	47
8. 飛行計画	
8. <b>飛行計画</b> .....	53
9. 尾行	
9. <b>尾行</b> .....	61



## 1. 特高警察



## 1. 特高警察

早暁、一番鶏が鳴いた途端、表の戸を叩く音が聞こえた。

ドンドンと力任せに叩いているが、あいにく樫の木で出来た頑丈な引き戸だった、人間の手で壊せるものではない。信蔵は眠い目をこすりながら、土間の下駄を引っ掛け目の高さにある小窓を少し開け外を覗いた。制服の警官が四名と背広姿の男が一人立っていた。

「警察だ、開けなさい」

「何事でしょう、近頃は物騒なので何か証明するものを見せて下さい」

「つべこべ言うな、ここに下宿している前田吾郎という学生に用がある」

信蔵は嫌な予感がした。

二、三日前に出入りの酒屋のご用聞きの小僧が、特高の捜査官がうろついていると教えてくれたのだ。警官は制服姿で腰にサーベルを下げていて警察署の人間らしかったが、背広姿の男はその特高（特別高等警察）の捜査官に思えた。

前田吾郎はこの家に下宿している四人の学生の一人で、帝国大学法学部に通っていた。以前、彼の部屋にマルクス、エンゲルスの「資本論」が置いてあるのを見つけたことがあり、多分その件で捜索を受けたのだらうと察しは付いた。自業自得だが、しかし、特高警察に連れて行かれる人は目にしたことがあるが帰ってきた人を見掛けたことがない。巷間ささやかれる噂では、それ位過酷な尋問を受けているそうだった。

信蔵はこの善悪は判断できなかったが、親元から預かっている以上、命の保証くらいはしてやらねばならないと思い、妻女のツネに出来るだけ時間を稼ぐように言って、前田のいる二階に駆け上がった。

「前田さん、起きて下さい」

「大家さん、どうしたんです？　こんなに早い時間に」

「いいからこっちに来て下さい。特高があなたを尋ねてきています」

信蔵はそう言って、つべこべ言う前田の袖を引っ張って、父が書齋にしていた二階の端の部屋に連れ込んだ。

「大家さん、わたしは何もしていませんよ。彼らに説明しますから」

「駄目です、そう言いながら連れて行かれて、帰ってきた人を見たことがないんです。そんなことになったらあなたの親御さんに合わせる顔がありません」

「待って下さい、わたしが出て行かないとすれば、屋根伝いに逃げろと言うんですか？」

「いえ、ここにしばらく入っていて下さい」

信蔵は、父の愛蔵書が収められた書棚の端を少し持ち上げ、力を入れて押し込むと棚がぐるりと回り、後ろに幅一尺ほどの廊下が現れた。

「何です、これは？」

「説明は後でします。この廊下の先に階段があるので、そこを上がって屋根裏部屋にいて下さい。警察が帰ったら、朝食を持って行きます」

「はぁ」

前田は、半信半疑そうな顔で書棚の裏に消えていった。

前田の無事を見届けると、信蔵は前田の寝具だけ散らかしておいて、玄関先に戻った。土間の上で、警官五名をツネが一人で食い止めている。戦う材料は相手に捜査令状がなかったと言うだけであった。しかし、治安維持法による特別高等警察は内務省警備局直属機関で、捜査令状などと甘っちょろいことは言わないそうだった。信蔵は気を取り直し、背広の男の前に進み出た。

「我が家では四名の帝国大学学生を親元から預かっています。もしもの時はわたしが責任を負います。今回の狼藉について説明してもらいましょうか」

「説明する義務はない。治安維持法違反だ。前田吾郎は三日前に、同学学生数人の前でこともあろうに、資本論の講義をした。お目こぼしは出来ない」

「でも刑事さん、学生のうちは内容の真の意味を知らずに人前で講演してしまうことあるじゃないですか」

「ふん、知らないものに知らせることが問題なのだ。どけ」

そう言って土足で上がり込んできた。

この家には信蔵とツネと子供二人に、下宿している学生が前田を含めて四人いた。四人も、と言うとさぞ大きな家と思われるかも知れないが、実際に大きかった。

信蔵の父、渡辺太郎吉は、嘉永元年（1848年）栃木に生まれて十歳の時に横浜に新しくできた工場に見習い工に出された。この当時の鑄物工場の集まっている地域だった。砂型を固めて溶けた鑄鉄を流し込む。砂型を作る器用さと、根気を要求される仕事に太郎吉は向いていた。修行中に時代は明治に変わった。太郎吉はすぐに一人前の職人になり、二十五歳で独立を許され、そして結婚した。これを機に東京府内に工場を持ち、徐々に大きくしてきた。そして日清戦争後の、賠償金景気でひともうけし、つづく日露戦争、そして第一次世界大戦で未曾有の造船景気に沸き返り、船の動力であったボイラー部品として鑄物製品を大量に受注し、太郎吉は百万円近い儲けを稼ぎ出した。そのとき本郷に三百坪の林に囲まれた土地を買ったのだ。

真面目な太郎吉であったが、ひとつだけ趣味があった。忍者である。当時の娯楽であった講談を聞き、戦国時代に活躍したとされる忍者の虜となったのだ。

最初は、古書店で買い求めた「萬川集海」《ばんせんしゅうかい》などの文献などを読



みあさる程度であったが、金に余裕が出来る時、骨董品を集め始めた。本物の手裏剣や小柄《こづか》、忍び刀などを蒐集した。信蔵が小さい頃、手裏剣を勝手に持ち出して庭の檜の木に投げて刺さるのを見て、太郎吉に大声で怒られた記憶があった。ちゃんと研いで油を差してあったのだ。

そして、晩年に好景気を迎えると、それで得た金で本郷に木造二階建ての忍者屋敷を建ててしまった。明治三十三年のことだ。何度も伊賀の旧家へ研究しに行っていたようだった。この家の図面は太郎吉が長年研究して書き起こしたもので、けっして思いつきではなかったのだ。二階建て総床面積百八十坪、大きな天井梁が玄関を貫通している立派な作りの日本建築で関東大震災のときもびくともしなかったし、火災はまわりの塚や樹木が遮ってくれた。隠し扉や、隠し廊下の図面は、太郎吉が屋敷完成と同時に焼いてしまった。こんなところも筋金入りだった。

父が亡くなる前に、信蔵は家の概略だけは教えてもらったが、実際には、これ以外にもまだ隠し部屋がありそうだった。正直、信蔵の手に余る存在でもあった。修繕にとにかくカネが掛かるのだ。屋根を葺き替える職人に、二階建ての割に屋根が高すぎるのだ、地下にも何かありそうなの言われながら、そのたびに、愛想笑いでごまかした。謎は謎のまま残しておかなくてはならない気がしていたのだ。

実際、全貌を確かめるには解体調査しかなかったが、当家の財産状況ではこんな大きな屋敷の建て替えなど出来るはずがなかった。

工場と離れた本郷に土地を買った理由は、晩年の父の話では、信蔵を帝国大学に通わせようという目論見があったようだ。実際には信蔵の成績は高等学校へ行けるほどのものではなく、中学校を五年がかり……優秀な生徒は三年で卒業可能だった……で卒業するのがやっとだった。それで、そのままでは余りに父に申し訳がないと、帝国大学の学生さんの下宿屋をはじめたという次第であった。

父の商売は順調だったが、第一次大戦後に訪れた不況の影響で、父の死後、徐々に悪化し大正十二年に倒産し工場は人手に渡ってしまった。家と、父の残した骨董品の類は何とか守り抜き、今、こうして信蔵が銀行勤めをしながら下宿屋を営んでいる。

しかしながら、当時の大学生は一種のエリート階級で気位が高くよく喧嘩をしては、信蔵が仲介に入ったりしていた。警察に行くのもこれまでに何度かあった。

「前田の部屋はどこだ？」

背広男が高圧的な態度で聞いた。踏み込んだものの部屋数の多さに閉口したらし

かった。

「こちらです」

信蔵は、前田がいないことを知っていたので余裕を見せて階段へ案内した。ここで信蔵は靴くらい脱いでくださいと、言い、制服警官も革靴を脱いでついてきた。父が当時三十万円も掛けた屋敷だった、赤穂浪士が討ち入った吉良上野介の屋敷ほどではないにしても、信蔵夫婦だけでは掃除も出来ないくらいの大きさだった。現に全ての部屋を使っているわけではなく、半分以上は物置になっている。

二階の南側に前田の部屋があった。信蔵が襖を開けた。

しわくちの布団と文机があるだけで、もちろん前田はいない。警官が中に入り布団を確かめた。

「稲垣さん、まだ少し温かいです」

制服警官は、この背広男を稲垣と呼んだ。

「ふん、忠臣蔵みたいなことを言うな。ここから逃げたとでも言うのか」

稲垣は信蔵に向かってそう言った。

「おかしいですね。昨日から帰ってらっしゃらないのですが……」

「何だと、じゃあ、この布団は何だ？ 説明してみろ」

「猫でも潜り込んでいたんじゃないですか」

確かに窓の外には猫が歩いていた。こちらをみて尻尾を振り上げた。威嚇なのかお愛想なのかはわからない。いずれにせよ、布団の温度でここにいたのかどうか判断するには時間が経ちすぎている。

「帰ってこなかっただと？ どうして警察に届けられないんだ、ああん？」

「学生さんは友人方と議論に夢中になったり、お酒を召してときどき泊まりがけのことがあるんですよ、若い方にはよくあることです。そりゃあ、三日も四日もいなくなれば心配しますが、一晩くらいなら、ねえ」

「とぼけやがって」

稲垣は不機嫌そうな顔で、警官の一人を警察署に走らせ……この家には電話はなかった……残りの人間で前田の本棚を調べはじめた。信蔵は心配げに見ていた。実際に、前田が「資本論」や「共産党宣言」などの研究をしていたのを見ていたからだ。そして、警官は満足そうな顔でそれらの書物を押収した。床にばさっと落とされ、もう一人が風呂敷を広げて積んでいった。押収は前田のノート類にも及んだ。日記はつけていたのかどうかわからなかったが、この場にはなかった。

「これだけの研究をしていた男だ。日誌くらいつけているだろう？」

「さあ、わたしは下宿の大家に過ぎません。学生さんの研究のことなどさっぱりです」

「とぼけやがって……他の下宿人も調べさせてもらう」

明らかに信蔵の捜査妨害に対する嫌がらせと感じたが、特高に逆らうほどの勇氣はなかった。近所の人のお話では道行く人の五人に一人はスパイと言われている。銭湯での独り言すら把握されていると言う噂もあった。

信蔵は他の学生だけは助けなければならない、そう思っていた。ある意味で不真面目

とも言える前田と違い、井上準一郎、古柴三郎、横井正は工学部航空学科の秀才であった。信蔵の長男豊と妹のヨシコにときどき勉強を教えてもらっている。そんな彼らに疑いの目を向けられたくはなかった。

彼らの部屋も早朝の搜索でもあり、寝乱れていたが机と本棚は綺麗に整理されていた。読んでいる文献はほとんど、航空先進国の英国や米国のものだった。英語の読めない警官はいちいち、これは何の本だ、と説明を求めた。

面倒になった上級格の井上が、丁寧、でもなかったが説明した。  
「この、英文の中のイラストを見て、図やグラフが描いてあるのが目印です。何の変哲もない参考書のひとつです。それに思想・政治的信条では飛行機は飛びません」  
「屁理屈を言うな。全て押収し、こちらで学生に必要なものかどうか判断する」  
「待って下さい。その講義は海軍航空本部の藤田中佐が担当しています」

本当かどうか信蔵は知らなかったが、工学部の教官に海軍出身者がいたことは聞いていた。それに海軍の名前を出すと特高も少しトーンダウンした。海軍を敵に回すほどの力はない。

「いいだろう。工学部の諸君についての専門書は除外する」

信蔵はほっとした。

朝食の支度は現在、ツネと朝だけ手伝いに来ている近所の娘とが作っている。早朝からの搜索のために信蔵も少しお腹がすいてきた。

しかし、信蔵だけは解放してもらえなかった。

「お前の書齋も見せてもらおうか」

稲垣は意地悪そうな目でそう言った。まさか、父の隠し廊下が見付かることはないだろうが、あそこには父の使っていた書籍が収めてあり、あまり他人に触られたくはなかった。

父の書齋はさっき前田を連れ込んだ二階の奥の間だった。普段は信蔵の書齋だが、父が使っていた、米国海事法、為替法、小切手法と言った貿易に必要な法律書が一通り揃えてあった。また、英語の読めない警官により、根掘り葉掘り聞かれる羽目になった。

もっとも、信蔵は中学校出なので英語は読めたが国際商法などは知識の範囲外のことだった。質問にはひとつも答えられず、その結果ほとんどの書物を押収されてしまった。それに、商法についても、警官達は商人が手形を使って決済をすることなど頭にはない。昔ながらに、番頭と旦那がそろばんをはじくだけと思いこんでいる。昭和になってそんな古めかしい商業スタイルはなくなったと説明しても無駄であった。

午前八時、リヤカーに乗せられた書籍類が運び出され、信蔵には後日出頭するよう申し渡された。



## 2. 昭和恐慌



## 2. 昭和恐慌

もっとも、言われただけで後から通知などは来なかった。学生さんには遅くなってしまった朝食を出し、子供達は小学校へ出掛けていった。信蔵は、銀行に出勤しなければならなかったが、それより前田に事情を説明しておく必要があった。信蔵は仕事を休むことにして、ツネに町内の中田さんに電話を借りることと銀行への連絡をたのんだ。

父の会社があったときにはこの家にも電話があったのだ。ハンドルをくるくる回し、交換手に相手呼び出してもらうタイプの電話だ。父の希望通り信蔵が帝大を出て高級官僚になっていれば、電話をつけてもらえる。そんな時代でもあった。電話がなくなったときには子供心にも悲しかった。外から目立つのだ。普通の家はランプ用の電線が引き込まれているだけだが、電話のある家には、電話局からの回線が別に通される。だから、外から見たら丸わかりだった。近所の中田家は大手企業の重役で電話を持っていた。奥様が近所付き合いに積極的な人で、電話も快く貸してくれた。それで年末にはツネと一緒に挨拶とお歳暮を持って出掛けた。

銀行への連絡はツネに任せておいて、信蔵は父の書斎から隠し廊下に出て、階段を上り、屋根裏の隠し部屋に行った。

数年ぶりに上がった屋根裏部屋だったが、少し雑巾掛けをすれば十分使えそうだった。気まぐれに作った小屋と異なり、伊賀の上忍の屋敷を研究して父が設計したのだ。水は部屋から直接井戸水を汲めるようになっていたし、汚水は特別の銅製の樋が目立たぬよう裏の壕に流れるようになっていた。食糧の備蓄はなかったが、昔風に干飯などを置いておけば当分の間、雲隠れすることが可能だったに違いない。

木の扉を開けると、前田が不安そうな面持ちであぐらをかいていた。「特高の連中は帰りましたよ。案の定、本は押収されましたが、あなただけでも無事であった」

「どうも、ご迷惑をお掛けします。それでこの部屋は何ですか？」

「ははは、驚かれたようですね。父が忍者通でして、昔、金持ちだった時代に屋敷を忍者屋敷にしてしまったのです。ここから水も汲めますし、汚水も流せます。食べ物は毎日、階段の下に持ってきますから当分の間ここに潜んでいてください。特高にはあなたが失踪したと言ってあります」

「そうですか、じゃあ大学にはしばらく、いや、もういけないかも知れませんね」

「いずれほとぼりが冷める、そう思いますよ。でも前田さん、どうしてあんな危険な本をお持ちだったんです？」

「確かに危険かも知れませんが、しかし、今の不況下での財閥主導型の経済に不信を抱いていたのです。ソ連の共産主義は確かに危険かも知れませんが、それはあの国の国民生活を見てみないとわからないことです。どんな制度でも幸せに暮らせるならそれに越したことはありません。一番いけないのは、知らないこと、知ろうとしないことです。実際にソ連の国民を観察し、悲惨なものなら、その原因を突き止め、制度が悪いのか運用に問題があるのか、それを見極めなければなりません」

「それで、あんな本を集めたんですか？」

「そうです」

「確かに現在の経済政策はいわゆる資本主義で、十八世紀のミルやマーシャルの需要・供給理論を元にしています。それでいけないことでもあるのですか？」

信蔵には前田が命の危険さえある共産主義などに手を伸ばす気持ちは、若者特有の冒険心と捉えていた。

「現に政府も不況から脱出できないでいるじゃないですか、計画経済ですと好況もないかわりに不況もないわけです。それに、経済先進国であるアメリカでも不況を脱し切れていません」

「例えばどういうことですか」

「モノが少なければ価格が上がってそのうち売れなくなり需要が落ち着く、逆にモノが多くなれば価格が下がり企業が損をして生産量が落ち着く。この現象が基本です」

「ええ、わかりますよ」

「でも、その変動が企業の倒産や、銀行の破産を伴うものだったらどうでしょうか？」

もうこの理論は破綻しています。倒産した会社は再び景気が良くなっても何も産み出さないからです。こうなる前に国家による大規模な市場介入が必要とは思いませんか？」

「それは、そうですねえ。現に助けられましたし」

「これを日常的に行うのが、ソ連型の統制経済なのです」

「ほお」

昭和二年の金融恐慌は、三月十四日の衆院本会議での片岡直温大蔵大臣の失言から端を発した。破綻寸前だった東京渡辺銀行が、融資のめどが立った後、その情報が伝わらず、大蔵次官のメモには渡辺銀行は破綻したと書いてあり、大臣はその通り読み上げた。単なる失言だったが、その後、東京渡辺銀行はもとより、全国の銀行で取り付け騒ぎが起こった。若槻内閣は総辞職し、田中義一内閣が発足、大蔵大臣に就任した高橋是清は紙幣の大幅増刷とモラトリアム（銀行の決済日を延期させること）で、社会不安から来る騒動を鎮めきったが未だに火種はくすぶっている感じだ。

「でもアメリカの不況と共産主義と何か関係があるのですか？」

「アメリカは現在は国内消費だけで賄っていますが、正直生産過剰なのです。フーバー大



統領は、古典経済論の信奉者で、需要・供給バランスの原理で自然治癒すると放置していますが、実際には政府による大規模な介入が必要です。それに、アメリカの特殊性も考慮しなければなりません」

「はあ」

信蔵には何のことやら理解の範囲を超えていた。

「ヨーロッパは植民地を閉鎖市場にしてしまい、残るは中国だけです。アメリカも狙っていると同時に日本も進出を伺っています。放置しておけば日米対立です」

「アメリカと対立？ まさか」

「アメリカはヨーロッパ列強諸国と異なり、海外植民地をあまり持っていません。しかし、その生産能力は相次ぐ戦争でヨーロッパより大きくなりました。従って大きな消費者が必要なのです。ロシア革命前まではロシアも購入していましたが、ソ連に変わってからは友好関係にありません。残るは中国ですが日本が中国にまで手を出せば当然、利益を侵されたと取られるでしょう」

「理解は出来ませんが、共産主義だとそれを防げるのですか？」

「まず、計画経済、資本の国有化で無用な株取引と倒産を防ぐことが出来ます」

信蔵は共産主義などハナから信用していなかった。

「でも、資本の国有化で皆が労働者になるのでしょうか、働かない人が出てくるんじゃないでしょうか。わたしは成り立たないと思いますよ」

「確かに欧米人はそうです。労働は神から与えられた罰と思っています。しかし、日本は違います。労働を生き甲斐に感じる数少ない民族なのです。きっと、浸透しますよ、それに資本主義が従来の商売に理論を後付けしたのに対し、共産主義は理論先行です。理論武装が完璧と言うことは指導者層に受け容れられやすいメリットがあります。いいことだけではありませんが、そのうち流行するでしょう」

少し語尾が投げやりなのに気付いた。

「前田さんはそれでも何か不満があるのですか」

「完璧すぎるんですよ、前提から結論までが。どこかに不備な点があるような気がしてならないのです。大流行する前に力のある学者が一石を投じなければ危険です」

「なるほど、そのために研究していたわけですか？」

「ええ、まあ」

それでも、なお煮え切らない返事を感じた。

長い時間話し込み、信蔵は朝昼兼用の食事を取りに下に降り、また、上がってきた。

「掃除もしなければなりませんね」

「いえ、わたしがしますよ、どうせ、家から出られないんですから」

「そうですか、では、雑巾だけ置いておきます。下は書斎になっています。英語の本は押収されてしまいましたが、小説はあります。好きなときに降りて持って上がって結構です」

「ありがとうございます」

とは、言うものの経済関係の書籍は全部なくなってしまい、前田も持ちぶさたの様  
でしばらくすると、井戸から水をくみ上げて雑巾掛けをはじめた。それで、信蔵は一階  
に降りてきた。

ツネが心配そうに見ていた。

「お父さん、大丈夫なんですか？」

「流石におじいさんの忍者屋敷だ。特高の連中も目の前の本に気が取られてあの部屋には  
気付かなかった。……ああ、ご近所には挨拶しておいたんだらうな」

「ええ、前田さんのことは話していませんが、騒動のお詫びと英語の本を持って行かれた  
とだけ話してあります」

「あの部屋には、これから階段の下に食事を持って行くようにしてくれ。それから、前田  
さんは失踪したことにしてある。郵便物なんか受け取るんじゃないぞ」

「わかりました」

### 3. 下宿生



### 3. 下宿生

夕方になり、工学部の学生さんが下宿に帰ってきた。友人も連れてきている。いつものことなので、ツネもご飯を余分に炊いていた。四人で楽しそうに飛行機の話をし、信蔵の息子の豊も嬉しそうに井上の話を聞いた。

「大家さん、そう言えば前田さんは、本当に特高に目をつけられて失踪したんですか」

「ええ、そうです。実家には、そちらに戻るかも知れないと手紙を書いたところですよ」

「あの人ねえ、元は哲学者だったんですよ。籍は法学部ですけどね、経済学も学んでいたなあ」

「学生さんから見て、古典経済学はどう思います？」

「需要・供給のバランスに依存する。田舎町の商売ならそれで成り立ちますが、世界規模の経済モデルには当てはまりませんよ、現にアメリカは第一次大戦後、大幅な生産設備の拡大を行っていて製品をもてあまし気味です。しかし、ヨーロッパは未だに大戦の影響を受けて購買力がありません。それに、大手顧客だったロシアもソ連になり資本主義経済から脱退し、結局アメリカ製品を買うのは日本と中国しかないわけです。近々、アメリカ自体が不況時代に入っていきます。バランス論だけでは破綻してしまい自然回復できない規模になってしまっています。破綻を回避するためには国家レベルの市場介入が必要です」

工学部の井上ですら、屋根裏の前田と同じ様な分析をしていた。

「また、取り付け騒ぎですか？」

信蔵は今度こそ銀行が破産すると思った。前回の騒動は日銀特別融資で乗り切ったが、同じことを何度も耐えられるような、大きな銀行ではなかった。

「今度はアメリカ経済が落ち込むのです。前回の比ではないと思います」

こんな話を聞いてもいいことは少しもなかったもので、信蔵は話題を彼らの研究分野に変えた。

「飛行機の未来は華々しいものですか？」

井上が答えた。

「教官の話だと海軍内部でも意見は分かれているようです。ワシントン軍縮条約により、戦艦加賀と赤城が航空母艦に改装されました。先の大戦では、飛行機から塹壕に爆弾を落としたことから、有力な武器として認識されています。飛行機で爆弾を運べるなら、戦艦の主砲より遠く、正確に攻撃を加えられる。そう考えている人も多いようです」

「海軍は飛行機至上主義なのですか？」

「教官の話だと、戦艦派と航空機派に分かれているそうです。航空機なんかで戦艦に攻撃

なんか無力という意見とそれに真っ向から反対する意見です。航空機派の中でも、戦闘機主義の人、爆撃機主義の人と様々な意見が入り交じっているそうです」

「戦闘機？」

信蔵にとっては新しい概念だった。庶民に取り飛行機など曲芸飛行の複葉機しか見たことがなかった。

「ああ、敵の軍艦を攻撃するのは攻撃機と呼んでいます。爆弾や魚雷を投下するのが目的の航空機です。これらの護衛をするのが戦闘機です。爆弾を積まない代わりに、機関銃で味方機を護衛するのが任務の航空機です。これを軽視する流れが出来つつあります。爆撃機重視主義です」

「井上さんはどう思うんです」

「航空機と言っても、まだ、実績がありません。ですから伝家の宝刀ではなく単に将棋の駒が増えた、つまり今まで艦艇に限られていたのが、航空機も使えるようになった、それだけのことです。うまく組み合わせて使わないと痛い目を見ることになりますよ」

井上の頭の中には最新鋭の飛行機で敵の戦艦を次々沈めていく光景が浮かんでいるようだった。

「組み合わせ？」

「ええ、例えば爆弾を満載した爆撃機に、敵の戦闘機が襲いかかるとよけることが出来ません。そのときは爆弾を捨てて遁走です。逆に戦闘機だけだと機関銃しかないので、軍艦や地上への攻撃は出来ません。それに現在海軍の保有する航空母艦は世界最大のものですが、大きいのがいいのか、小さいのがたくさんあるのがいいかは、今後の運用の研究に掛かってくるでしょう。我々の研究に対する要求もそれによって大きく変わってきますよ」

「ほお」

「例えば、今の主力は複葉機がほとんどですが、これの欠点は速度が出ないことです。速度を出すには主翼を小さくしなければなりません、そうすると、滑走路が長くなります。その点、今の航空母艦は若干有利と言えます。しかし、大きいと敵の目標にされやすく、これが沈むと、航空機は帰る先を喪います」

この時代の庶民にとっては夢物語の世界であった。軍に入って高級幕僚になるか、航空機メーカーに入って設計者になるか、いずれにしても信蔵には遠い世界の話に思えた。

信蔵が夕食の席で考え込んでいると、ツネが呼びに来た。

「お父さん、ちょっと」

そう言って台所から手招きした。信蔵が席を立ち、台所に行くと、ツネは勝手口にお客が来ていると言った。こんな時間に来るような客に心当たりはなかったが、勝手口から外に出た。いたのは、少女と言うには少し大人びていて、女と呼ぶには少し幼い、十五、六か十七、八かと言う娘が立っていた。継ぎのあたって着物を着ているところを見るとどこかの女中かも知れないと思ったが、信蔵は丁寧な口調で用件を尋ねた。

「何か御用ですか」

「あの、わたし、松本梅子と言います。こちらの前田さんに親しくしてもらっているもの

です。急に会えなくなったものですからご病気かなと思ってお尋ねしたのです」

「そう……」

今朝捜索を受けたばかりだった。早速夕方に探りを入れに来たところから、特高のスパイを疑わせた。しかし、スパイにしては幼いし、純朴そうな娘で悪いことをするようには見えなかった。信蔵は娘の目を見た。一重まぶたに小さな黒目勝ちの瞳をしていたが、どこかに陰がある様感じた。だが、鼻筋がすっきりと通り、きりりと結んだ小さな唇が知的で上品な印象を与える。髪は日本髪ではないが、後ろに丸めて髪留めで結ってあった。女中と言えば女中に見えるし内務省の回し者と思えばそうも思えた。

梅子は、懐に手を入れながら少し考えながら話した。

「あの、もし、ご病気でお休みになっていらっしゃるのでしたら、この手紙を渡していただきたいのですが」

そう言って封をした手紙を懐から取り出した。

思わず受け取りそうになった信蔵だったが、第六感が警告を発していた。

「ああ、悪いんだが、前田さんは急に失踪したんだ。ここにはいないんだよ」

少し冷淡と思ったが、そう告げた。梅子はがっかりした様子でうつむいた。信蔵はひょっとして本当に前田の恋人だったのかなと、疑った自分が冷淡な気がした。

「きみ、前田さんとはどこで知り合ったんだい？」

「わたし、帝大近くの食堂で給仕（ウェイトレス）をしているんです。それで、前田さんがよくいらっしやるので知り合いになったんです」

「そうかい、いい人だったねえ」

亡くなったような言い方だった。

「あの、わたしは前田さんに本を貸してもらったり、勉強を教えてもらったりしていただけで変な関係ではありません」

何も、責めていないのに少女らしい言い訳をした。

信蔵は念のため、この梅子が前田のことをどれだけ知っているか、質問責めにした。彼女は前田の故郷が浜松であること、帝大での専攻が商法であること、指導教授が太田という人物であることを答えた。これ以上は、信蔵も知らないので確かめようがなかった。

——信用しても良さそうな気もするが、この程度の情報は特高も掴んでいるはずだ。

信蔵は、一度追いつ返して、前田に松本梅子のことを聞いてみて、もし、知っていると言ったら今度、その食堂とやらに行ったらいいと考えた。想像通り特高のスパイならこれから何度も訪れるだろう。

「悪いね、前田さんは大学での活動のことで特高に目をつけられたらしいんだ。だから、本当に拘束されたのか、前もって失踪してしまったのか、僕も知らないんだ。手紙を預かって本人に渡すことはもう出来ない。君が彼の故郷を知っているなら、そっちに送ってみたらどうかな」

「でも、ご両親はわたしのことご存知じゃないし……」

梅子は悲しそうな目をした。

信蔵は可哀想になったが、彼女がもし、特高のスパイだったら受け取ったが最後だった。警察犬を動員してでも家捜しするだろうし、この家の建設に携わった大工や職人も、信蔵は知らないが特高なら突き止めるかも知れない。屋根裏部屋の発覚以前に前田がこ

こにいると臭わせてはならなかった。

——どこか別の場所に隠匿していると思わせた方がいいかも知れない。

信蔵は梅子の目を見ずに、「じゃあ、ご実家に貸してもらった本を返すと書いて、同封すればいいんじゃないかな。その通りなんだろ?」と、言ったところ、彼女の給金では小包など年に一度しか出せないと言った。

「あ、そう」

彼女の受け答えに不自然さは全くなかった。本一冊郵送するにも五銭か十銭かは必要だ。月給取りならともかく、住み込みの女中なら……月に五十銭もないだろう……生活必要物以外に給金を使う余裕などないはずだ。前田との関係も深いものではなく、本当に彼女の言うとおりに話をする程度だったと思える。その場合の前田に関する情報も、浅過ぎもせず深過ぎもせずと言ったところで、疑いを挟む余地は全くない。

しかし、この完璧すぎる松本梅子の態度に、却って疑いを深めてしまった。

朝、捜査指揮を執っていた、稲垣という捜査官の思慮の深さを考えると、十分疑われていると思っていいだろう。もし、ここが忍者屋敷でなければ、朝方に強襲されれば前田は完全に逮捕されていて不思議でなかったのだ。それで、そのまま信蔵は立ち去ろうと背を向けた。

「あの」

立ち去ろうとした信蔵をなおも、追いかけた。

「まだ何か?」

迷惑そうな顔で聞いた。

「本当は前田さんがどちらにいらっしゃるかご存知なのではないですか」

「いいえ、わたしが聞きたいくらいですよ」

「嘘、わたしにはわかります」

信蔵は真剣に問い詰めてくる梅子に、実はもうすでに居場所がばれているのではないかという恐怖観念を覚えつつあった。

「だ、だから知らないと言っているでしょう。もう遅いから帰りなさい。あなたのような若い娘が出歩く時間ではない」

信蔵はそう言って勝手口の扉を閉めた。軽く手で締めたつもりだったが、ぱたんと大きな音が鳴り響いた。下宿の学生が二人、何かとやって来た。不審人物と思ったようだった。

「ああ、騒がせてすみません。しつこい押し売りが来たもので」

「そうですか? もし、何かあったら言って下さい。武道の心得もありますから」

「いえいえ、そんな物騒な客ではないですよ」

学生達が部屋に帰ったのを見届けて、信蔵はツネにお茶を頼んだ。ツネも心配そうにしていた。

「お父さん、大丈夫ですか」



「何が」

「前田さんのことですよ。治安維持法違反だなんて……」

「若い人にはよくあることだ。それに前田さん自身は共産主義者ではない、経済学の研究のためにあの本を持っていただけだ。まあ、何にしても、どこか安全な場所に避難させないといけないだろう」

「安全な場所って？ 屋根裏にずっとかくまうつもりですか」

「まさか、あんなところで一ヶ月もいられるものか。二、三、心当たりの人をあたってみるよ」

文句を言いたそうなツネを横目に見ながら信蔵はお茶を飲んだ。後で、当の前田にさっきやってきた娘のことを確認しておかなければならなかった。



## 4. 屋根裏部屋



## 4. 屋根裏部屋

次の朝、信蔵は朝一番で前田の様子を見に屋根裏部屋に上がった。昨日の食事と食器が階下に置いてあった。書籍は昨日、持ち込んだらしく夜中にあぐらをくんで読んでいたようだった。

「ああ、布団がありませんでしたね、今日妻に、持ってこさせます」

「気にしないでください。雑魚寝には慣れてますから」

「そうですか？　でも、ここにいられるのは最悪、一ヶ月と考えています。今日、信頼の出来る人間に当たる予定ですが、どこか安全な場所に移ることを計画しています」

「わたしはこの部屋が気に入りましたが、それでは大家さんに迷惑が掛かると思っています。少し考えたのですが.....」

「まあ、ゆっくり考えてください。わたしは今日からまた、銀行勤めです」

そう言って、信蔵は階段を下りた。彼が信蔵になるべく迷惑を掛けまいと思っていることは容易に想像がついた。

その後、信蔵は下宿の学生三人と普通に朝ご飯を食べて、出勤していった。本郷から弁当と鞆を持って、丸の内まで一時間弱歩いて通っている。

信蔵は東京中央銀行に中学五年を出てから就職した。当時裕福だった父の口利きもあったが、真面目に四十歳になる今年まで勤め、現在は渉外課一係の係長をしている。いわゆる企業相手の営業だ。取引相手は主に大企業の下請けをしている工場や商店である。この銀行の預金量比較では中堅と言うより弱小に近いランク付けだった。

信蔵が席について、しばらくすると課長が呼びに来た。

「渡辺君、ちょっと一緒に来てくれ」

信蔵が課長に連れられ会議室に行くと、調査部長と幾人か、名前は知らないが経営上層部の面々が待っていた。調査部長は融資先の経営、資産状態を調べる部署の責任者だ。「現在、不況を乗り切るために政府大蔵省は円の切り下げ、アジア貿易の拡大、重工業化の促進策を行っている。当行もそれに沿うべく大手企業の下請け企業向け融資を増やしてきた経緯がある」

こんな会議に信蔵が呼ばれているのが不思議だった。

「渡辺係長、君の下宿に帝大の工学部の学生さんがいるね？　彼らは海軍将校とも面識があると言うが、何か有益な情報がないかね」

信蔵が呼ばれたのはそう言う理由からだった。確かに井上達の話をしていいか、少し迷った。プライベートな内容だから信蔵に話したのだ。だが、ここでの議題は銀行の

存続に関わることだった。今年に取り付け騒ぎなら日銀特別融資で乗り切ったが、次回もたすけてくれる保証はない。

「正直な話を致しますと、先の大戦以来、アメリカの工業力はヨーロッパをしのぐほどになりました。しかし、ヨーロッパ列強諸国とは違い、アメリカは海外植民地を余り持たないという特徴があります。ヨーロッパが植民地との貿易を閉鎖市場にしまい、他の国を閉め出した後、困ったのはアメリカを始め植民地を持たない国です。残るは中国市場ですが、もし、中国に手を出せば、アメリカとの摩擦は避けられません」

「アメリカ経済は生産過剰だと言うのか？」

「はい、ロシアやヨーロッパで買ってくれた時代と異なります。世界最大の工業国が消費地を持たないのです」

「渡辺君、当銀行の方針を説明しよう。我々も同じ分析をしていた。それで、次のアメリカ経済の混乱に備えて、あらかじめ現在の貸出先から資金を回収しようというのが結論だ」

それは単に銀行を守るための措置だった。

「でも、今のご時世にそんなことをすれば、大蔵省はもとより軍部からも睨まれます。政府が重点事項にしている、重工業への投資、主に大企業の下請け工場と商社になると思いますが、むしろ積極的に融資した方が、貸し倒れになったときに大蔵省からの救済が得やすいと思うんです」

「君の考えは商人として邪道だ。だが、一理ある。大蔵省と軍部を敵に回してまで頑張ることも出来ない」

信蔵の情報は、そのまま重役会議に掛けられることになった。

会議が終わって、お茶を飲んで信蔵は仕事場に戻ろうとした。課長が呼び止めた。

「渡辺君、昨日休んだだろう」

「どうも、ご迷惑を……」

「いや、それはいいんだ。噂では特高警察の捜索を受けたそうじゃないか」

「ええ、学生の下宿人を置いて居るんです。彼らは内容にかかわらず色々な本を読みます。その中にたまたま資本論が入っていたんです」

「ふうん、究極の資本主義と呼んでいるあれか」

「究極？」

「何も知らないようだな、マルクスが提唱したユートピアは、資本を国家が所有し全員が労働者となるものだ。何かに似てないか？」

「と、いいますと？」

「ほら、すでに大手のM重工業は自前の病院や商店を持っている。社員は格安で利用できる。企業が合併して日本がひとつの会社になったら、皆が、病院や、商店を安く使える。素晴らしいくないか？」

「そうですねえ」

「利益は株主である労働者に均等に分配され、搾取する階層は居なくなる。それが、究極の資本主義と言われた所以だ」

「しかし、だからといって……」

「そう、この思想はある意味危険だ。働かない人が出るというのは子供の考えだ。この理論の大前提におかしな点がある」

「課長も研究していらしたんですか」

「ああ、こんなものに有為の若者がのめり込むのを黙ってみておけない。欠陥は大前提にしている唯物論にある。人間は父母の営みから生じた偶然の産物、タンパク質の塊に過ぎないと称している。だから、皆平等なのだとうそぶいているが、偶然の産物なら、どうして人権や権利を主張できるはずがあるんだ。現にソ連では大勢殺されている」

「はあ、では、ヨーロッパの市民革命は違うんですか？」

「あっちも基本的には同じだ。新興市民、ブルジョワ階級が王様や貴族の首をはねた。このときには、神から与えられた人間の生まれながらの権利と称している。神が出てくるから後の話には整合性がある分、共産主義よりましだ」

この意見には、信蔵は触れたことがなかった。中学校を出たのは日露戦争前だし、共産主義など机上の空論と思っていたのだ。だが、資本が労働者のものになると言う、幻想が労働現場を変えてしまった。あちこちに赤い旗が立ち、ロシア革命にならって、徹底抗戦を主張し、武力闘争を行い、待遇改善、昇級の要求を通していった。政府はこの流れを危惧し、治安維持法を制定して思想統制に努めだしたのだ。

いや、取り締まらなければならないほどに労働現場の過酷さは度を過ぎていたし、こちらも日米関係同様、一触即発の危機にあった。

昼休み、所用のついでに信蔵は帝大近くの食堂……松本梅子から聞いていた……に偵察にいった。流石に日本最大の大学でもあり、本体も大きかったが、その周りにある食堂や娯楽施設、書店と言った学生街が出来、それも日本最大規模だった。信蔵は結局昼休み中に彼女の食堂を探すのはあきらめた。一人で探すには余りに多すぎた。

信蔵がうろうろしていると、田舎から出て来たような格好の杖をついたおじいさんが声を掛けてきた。

「もし、道を尋ねたいのじゃが」

「なんでしょう」

「東京帝国大学はどこにいったらいいのでしょうか」

信蔵は笑いそうになった。確かに明治の末に京都帝国大学が出来て、それまでの帝国大学は東京帝国大学に改称されたが、この地元でそんな呼び方をする人はなく、現に信蔵も帝大としか呼んでいなかった。

「おじいさんは、よそから来られたんですか」

「ははは、見ての通りの田舎ものでございます。孫が東京帝国大学に入ったというので、冥土の土産に一目見ておこうと思ひましてな」

この老人は孫の自慢がしたいのか、東京帝国大学とフルネームを呼び続けた。

「この一本向こう側の道路を東にまっすぐ進むと、武家屋敷のような門があります。そこから中に入れますよ。もっとも、中のことはわたしも知らないので学生さんにでも聞いて下さい」

「それはご親切に、どうもありがとう」

老人はそう言い残してまた、杖をついて歩き出した。信蔵は見えなくなるまで後ろ姿を見つめていたが、父の期待にかかわらず自分が進学できなかったことを少し悔いた。

その後、信蔵は近くの食堂に入り、弁当の後だったので、コーヒーを頼んだ。学生街だけあって何でも置いてありそうだった。講義をさぼっているのか、昼休みのせいなのか大勢の学生が集まってお喋りしていた。

しばらくすると腰の曲がった老婆がコーヒーを持ってきた。信蔵は危なそうに見えて少し中腰になり受け取った。

「ふおふおふお、すみませんねえ」

老婆はすまなそうにそう言った。見たところかなりの年齢だったが、この時代還暦を過ぎたら老人と呼ばれていたのだが、この老婆はその還暦の世代の母親世代らしかった。

「お元気そうですね」

信蔵は無難にそう声を掛けた。

「いいえ、もう年ですから」

老婆はそう答えた。正直だった。

信蔵が話しかけると、お喋り好きだったようで、そのまま信蔵の向かいに腰掛けて話し出した。少し話をしたらやはり八十代後半らしかった。当時江戸と呼ばれた東京の下町に生まれ、娘時代は桜田門近くの大名家に奉公していたと語った。

「ある日、雪の日だったかねえ。お屋敷が大騒ぎになって、井伊大老様が暗殺されたって、それはもう上を下への大騒ぎ」

「ほお」

「ほれ、彦根藩三十五万石と水戸藩十八万石が一触即発の事態で、当方も巻き込まれないようにと、お武家は皆、甲冑を着て鉄砲の用意までして狼藉者の乱入に備えていたんですよ。女は女で炊き出しを命じられて」

「どうして、そんな騒ぎに」

「お大名は世継ぎの届けのないうちに亡くなると、お取りつぶしと決まっていたんですよ。彦根藩もその条件に合ってたから、本当はお取りつぶしだったんですよ。でもあの状態でお取りつぶしになると、藩士が黙っていないでしょう？ 三十五万石ですよ。赤穂浪士の比じゃありませんよ。それで内乱を恐れた幕府がその問題を握りつぶして一件落着となったみたいですねえ。噂では」

「ほお」

信蔵は冷めてしまったコーヒーを飲んだ。こんなおばあさんはときどきいたが、歴史上の事件を生々しく聞くのは初めてだった。

「おばあさんはその事件の後はどうしていたんですか」

「ええ、瓦解（明治維新のこと）の後、大名家は公爵となり華族として残りましたが、奉公人は放り出されましてね。わたしはお屋敷の紹介で商家に女中にいったんです。その時にお父さんと結婚して、仕立物の内職などしながら暮らし、今はこうして娘夫婦の食堂で働いているんです。でもあの当時、尊皇攘夷だの何だのと言っていた連中がみな西



洋かぶれになって、恥ずかしくないのでしょうかねえ。わたしらにとっては徳川様の方が良かったですよ」

危険なことを口にするおばあさんだと思いつつ相づちは打たなかった。

「この年まで働くなんてえらいですね」

「これしか生き甲斐がないのです」

「お孫さんはいらっしゃらないのですか」

「男の子が一人。でも、ここの帝大に入るのだと、意気込んでいましたが、高等学校の入学試験に何度も落ちてそのうち諦めましたよ」

信蔵には耳が痛かった。

長い時間、無駄話をして信蔵は銀行に戻った。

この日の午後は特に問題もなく、午後二時に戻ったときにも仕事は遅滞なく進んでいた。信蔵は決裁印のいるものだけに目を通し、溜まった書類を処理していった。

午後三時になると窓口業務が終わり、内部の仕事が始まる。信蔵の部下の若い職員は、取引先に集金に出掛けていった。

終業間際、また、課長がやって来た。前田の名前は出さずに学生を預かってくれる人を相談したのだ。どこか、田舎の支店長の親戚でも紹介してもらおうと思っていたのだ。

「おい、渡辺君」

難しそうな顔をしていた。

「あの、下宿人のことですか」

「ああ」

課長は、信蔵を廊下の隅に連れて行った。余り大きな声では話せないらしかった。

「君の話していた下宿人とは、特高の捜索を受けた学生ではないだろうな？」

「いえ、違います。論文を書くためにしばらく静かなところにこもりたいと、それだけです」

課長は余り信用してない顔だった。

「一応、警告しておくが、あの学生に関しては特高の諜報員がすでに張り込んでいるらしい。国内でどこに移動しようがすぐにばれるぞ」

「どこでそんな情報を？」

「この銀行の調査部にも内務省につてのある人間がいる。あまり大きな声では言えないが、出来る限り身内の不幸は避けるべく努力はしている。だから、積極的に銀行に迷惑の掛かることはやめて欲しい。いいな？」

「はい」

「先方の内諾を得ているのは、博多支店の課長、広島支店の支店長、八戸支店の次長の親戚だ。全部、農家の離れだが、それでいいなら返事をくれ。なるべく早い方がいい」

「ありがとうございます、早速本人に伝えます」

信蔵は、それだけ言って自分の席に戻った。課長は全部お見通しの様だったが、これらの家に前田を預けて万が一その所在がばれたときに問題になると思った。しかし、た

かが本一冊のことで、内務省が本腰を上げるなど馬鹿げていると思った。  
勤務が終わると、信蔵は急いで帰宅した。

## 5. 松本梅子



## 5. 松本梅子

家に帰ると、ツネが夕食の準備をしていた。

「ただいま、今日誰か来なかったか」

「あら、お帰りなさい。郵便くらいですよ」

「そう」

それだけ確かめて信蔵は二階の書斎に入り、書棚を動かして隠し廊下に入った。懐中電灯で足下を照らしながら階段を上がり襖を開けると、前田は机に向かい本を読んでいた。信蔵は後ろから声を掛けた。

「前田さん、具合はいかがですか」

「はい、一日読書三昧です。少し運動不足ですが、贅沢を言うと罰が当たりますね」

「それで少し尋ねたいことがあるんですが、昨日の夕方、前田さんを訪ねてきた女性がいるのです。松本梅子と名乗ってましたが心当たりはありますか？」

「松本？」

知らないと言いたげだったが、知っている風にも見えた。

「ご存じですか」

「確かに大学の食堂に、ウメ子と言う女性がいて、知り合いと言えば知り合いです。しかし、学問に興味があるというだけで話をした程度で、わたしの住所を教えたことはないと思うのですが……」

「年齢や背格好はどんな感じですか？」

「二十歳で身長は……そうですね、百五十センチくらいで体格は普通です」

「二十歳？ もう少し若くないですか、と言っても見た目は人により違いますね。身長は百五十センチはおおよそ五尺ですね、わたしの見た感じと同じです。しかし、ここの住所を知らないんですね」

「ええ、でも本を貸したりしたことがあり、本のカバーに名前と住所を記入していたことがあったかも知れません。その女性は何か言っていましたか？」

「いえ、前田さんに連絡が取れなくなった、手紙を渡して欲しいと、それだけです。手紙は危険なので受け取っていません。不都合だったでしょうか」

「……分かりません。もし、本物だったら会って見たかった気もしますが、朝に搜索を受けてその夕方に、彼女が現れるのも何か不自然な気もします。会っていないと言ってもわたしが大学の食堂に現れなかったのはたった一日だけで、それが不安に思うなんて婚約者じゃあるまいし少しおかしいです」

「松本梅子自身の情報は他にお持ちですか？」

「実は、彼女の苗字が松本と言うのも知らなかったのです。いつもはウメ子と呼んでいました。カタカナのウメです。それに松に梅なんて少し偽名っぽいですよね」

「ええ」

「彼女の父親が鋳物職人で、社会主義の信奉者だと言っていたことがありますが、ひょっとしたらそっちの線からわたしがあぶり出された可能性もあります」

信蔵はまたか、と言うような顔をした。

「それで、あなたをかくまう先なのですが、博多、広島、八戸の田舎の離れで内諾を取ってあります。わたしの銀行の関係者です。折を見てここから脱出して貰おうと思っています」

「そんなことをして、もし見つければ大家さんや銀行に迷惑が掛かりませんか。それは出来ませんよ。自分の身の振り方は自分で考えます」

「何を考えてらっしゃるんです、日本中どこに行っても特高の監視からは逃れられませんかよ」

「まあ、しばらく考えさせてください。国内での避難は不可能でしょうから田舎の離れは断ってください。こんなことで他人を巻き込みたくはありません」

「でも、たかが、本一冊のことでしょう？ わたしはすぐにほとぼりが冷めると思うんですけどねえ」

「多分その容疑ではないと思います。この研究をしているといろんな人に出会います。そのネットワークを一網打尽に摘発する気にいるんでしょう」

「ええっ、そう言うことだったんですか。はあ、全く気づきませんでしたよ」

信蔵は、自分のお気楽さを少し悔いた。この若者ほどの思慮があれば、もう少しいい成績で大学にも行けたかも知れないし、銀行でももう少し出世していただろう。しかし、「資本論」一冊の問題ではないとなると、国内の避難先では生命の保証は出来なかった。もう、この先ずっと屋根裏部屋に潜むことになるのだろうかど不安になりながらも、今できることだけしておこうと気を取り直した。

「じゃあ、前田さん夕食をお持ちしますね」

「どうもすみません」

「それから、ここでは風呂にも入れません。たらいと手ぬぐいをお持ちしますので、それで暫く我慢してください」

「ありがとうございます」

## 6. 航空便





## 6. 航空便

信蔵が、食事を届け、トイレにしている簡易便器を取り替えて一階の台所に戻ると、井上とその友人が面白そうに、息子の豊に物理学の講義をしていた。楽しそうに目を輝かせながら井上の説明にうなずいている姿を見て、自分も小学生の時に、優秀な教師に出会っていたらと、うらやましく感じた。

「あ、お父さん。いま井上さんに理科を教わっていたんだよ」

「そう……。井上さん、どうも勉強のお邪魔をしましてすみません」

「いいえ、こちらにも人に話すことで勉強になりますから」

「飛行機の話ですか？」

「いえ、空気の重さと空気抵抗の話です、まあ、航空機の話と同じですが」

井上は、飛行機のことを必ず航空機と呼んだ。海軍が航空機と呼び、陸軍が飛行機と呼んでいて、彼は海軍びいきだった。

「空気の重さ？ 何ですかそれは？」

「空気にも重さがあるんですよ、一立方メートルで、一・二九キログラムです」

「へえ、そんなに……人間はつぶれてしまわないんですか」

「つぶれた人なんていませんよ、身体の中からも同じ力で押し返しているんです。この力を利用したのが、航空機の翼というわけです。大きくすれば何トンもの力で機体を支えられるんです」

「ほお」

信蔵はただ、感心していた。

難しい航空工学の話のをいとも簡単に説明してしまう、井上の頭脳にも驚嘆する思いだった。ふと、前田の避難先を相談してみる気になった。

「その飛行機ですが、どの位遠くまで飛ぶことが出来るんですか？」

「機体にもよりますが、長距離用のものだと、大西洋を横断したものもありますよ。確かアメリカ人が大正八年にアメリカ、アイルランド間の二千キロを飛行。それから、まだ新聞には出てないですが、先日の五月二十一日にこれまたアメリカ人がニューヨークからパリまでの五千八百キロを飛んだそうです」

「それは民間人ですか？」

「どう言う意味ですか」

「あ、いや、お金を出せば乗れるのかなど、思いまして」

信蔵は語尾を濁した。井上は軍人以外でも飛行機に乗れるかどうかという意味にとった様だった。

「そうですね、民間とは言えませんが国策会社としては大正十三年に航空会社が設立されています。しかし、郵便業務だけで人間は乗れません。まだ、認可されていませんが、来

年辺りから、東京・大阪、続いて東京・大連間の路線が始まるそうです。五、六人乗りの機体だと思います」

「そうですか。それは安全なのですか？」

「はは、大丈夫ですよ、確かフォッカー 3M と言うエンジンが三つもある機種で信頼性は高いと思いますよ」

この話を聞いて信蔵はふと、前田を満州か中国に逃がすことを考えついた。もしたどり着けなくても朝鮮であれば総督府の直轄なので、内務省の目は届かないし最適だと思ったのだ。航路の認可がまだでも試験飛行はしているに違いないし銀行か取引先のついでに乗せて貰おうと考えついた。

そこに、妻のツネがこっそりと、信蔵を呼びに来た。

「お父さん、また、あの人」

「あの娘さんかい？」

「ええ、本当に前田さんの関係者じゃないの」

「わからない、怪しいと言うだけで結論は出ていない。とにかく会ってみよう」

少女は勝手口の外で、おとなしく待っていた。今日はなにやら風呂敷包みを持参していた。

「いつも、突然押しかけてすみません。今日はどうしてもお会いしたかったのです。きなこ餅を持ってきたんです。と言ってもお店の余り物で申し訳ないんですが」

「きみ、前田さんはここから失踪したんだ。きなこ餅を作ったのは君の勝手だが、こちらに持ってこられても困るよ、持って帰って店の人と食べなさい」

「店には内緒で持ち出したんです」

説明しようと懸命になっている梅子を放置して信蔵は家の中に入ってきてしまった。そもそもの不幸の始まりはこの女の活動にあると思うと余計に腹が立ってきた。

この日は、井上は友人を連れてきていたので、家族より先に夕食を済ませ、部屋で議論しながらお酒を飲んでいて。おつまみがなくなったときには時々、漬け物などを台所に取りに来る。

そんなわけで、他の下宿人、古柴三郎、横井正の二人とおとなしくご飯を食べた。この二人は井上の一年後輩で、井上から研究上の指示を受ける立場にあるらしかったが、その態度は井上とは違っていた。

「古柴さんは飛行機に対する期待とかないんですか」

「ええ、私は教室での議論だけです。家が農家なので、実際に製造会社の設計に入れるか分からないし。今の経済情勢ではわかりません。ですが、今後は輸送の主役になるでしょうね。東京・大阪をどのくらいで移動できるかご存じですか？」

「さあ、列車だと、まる一日かかりますよね」

「それが三時間ですむのですよ」

「え、そんなに速いんですか。ほお」

「だって空を飛ぶんだし、途中で駅もないし、スピードも速いです。井上さんは海軍機に興味があるみたいですが、それ以外にも、後方支援の輸送機としても有力なんです。兵隊さんや武器弾薬をどこにでも運べる。船みたいに機雷で封鎖されることもありません」  
「なるほどねえ。話は変わりアメリカの経済はどうなっているんですか」

横井が古柴の代わりに答えた。

「先の大戦のときからの好況が持続していますが、需要と供給が数年前からアンバランスですよ。大家さんの方が詳しいんじゃないですか」

前田や井上と同じ分析だった。

「いや、わたしは国内企業への融資だけだから、外国のことには無頓着でして」

「そうですか。投資と呼んでいいのか投機と言うべきなのか、好況であふれたドル札が、株式市場に大量に流入して株価を引き上げています。経済実態がデフレなのに、インフレになっています。だからちょっとしたきっかけ、例えば今年起こった大臣失言による取り付け騒ぎの様な事態になると株式市場全体に大暴落を引き起こす可能性があります」  
「日本と違い、アメリカ経済には体力があるのではないですか？」

「そんな問題ではありません。制度運用上の問題です。大男でも小男でも風邪を引くときは引くんです。でも、これが資本主義の限界でもあるのでしょうか。前田さんも同じ様なことを言っていましたよ」

「じゃあ、不況になるのを食い止めるには共産主義しかないのですか？」

「いいえ、英仏のように植民地をうまく利用して国内産業を振興させる手段。それから、高橋蔵相の提唱している歳費拡大、アジア貿易の振興、これらが有効だと思っています。但し、効果が出るのは数年先で、非常時のカンフル剤にはならないでしょう。それに、日本が景気回復のためにアジアで伸びると今にアメリカと衝突する 때가来ますよ」

横井も、また、物騒な意見を述べた。

信蔵は、おそらく、若者が海軍の威勢のいい空気に当てられていると思っていたが、これを否定する材料が何もないのも事実だった。アメリカも軍縮条約の枠内であるが、老朽艦をスクラップにして新型戦艦の建造を進めていたし、フィリピン駐在アメリカ陸軍も依然として脅威であり続けていたのだ。

次の日、信蔵は早めに出勤し、昨日井上に聞いた航空会社のことを調べた。確かに大正十三年設立の航空会社で、東京の陸軍立川基地と大阪木津川飛行場の間で郵便飛行を行っていた。信蔵は、この会社との取引実績を調べたが直接のつながりはなかった。つてがなければ頼み込むのはもちろんのこと、認可を受けていない航路の情報など教えてくれるはずもなかった。

しかし、念入りに調べると、この航空会社のために飛行機の交換部品を輸入している商社を見つけた。立川にある日の丸商事だった。この商社への融資は信蔵の部下である一系の川崎と言う行員が担当していた。

八時に川崎が出勤するのを待ち、今日、日の丸商事に挨拶がてら顔を出すことに決めた。

「川崎君、今日一緒に日の丸商事に行ってくれるか」

「はい。偶然にも先方から呼ばれたところだったんですよ」

「先方から？ どうしてだい」

「わかりません、今日その話が出ると思います」

信蔵は、多分来年から拡大される路線に備え、輸入部品の取扱量が増えるのだと直感した。それならば、融資額の拡大しか話題はないはずだった。川崎には昼食がすんでから、先方に向かうと伝えておいた。信蔵はあらかじめ課長に営業方針について相談しておかなければならなかった。その場で現在の日の丸商事の資産、債務状況の情報をまとめたファイルを小脇に抱え、課長の席に向かった。

「課長、報告事項なのですが」

「なんだい？」

「日本航空運輸（※現在の日航とは別の会社）に部品を納入している日の丸商事という会社から、会談の申し入れがあり、わたしと一係の川崎の二名で昼から訪問しようと思うのです」

課長は、資料を一瞥して机の上にぼんと置いた。その上に両手を組んだ。

「そこは、大きいのかい？ 銀行を呼びつけるとは中々だね」

「すみません、情報が抜けておりました。陸軍立川基地の近くにある貿易会社で、その航空会社に部品を納入しています。それで、学生さんから得た情報では、来年から東京・大連間の定期便を開くらしいのです。そのための増資引き受けの件だと思うんです。陸軍御用達だし、業績もいいしで、われわれを呼びつけたのだと思います」

「ほお、じゃあ、会談はその話か」

「この定期便はまだ公になっていないので、直接話には出さないと思いますが、増資のために銀行側に業績を誇示する目的なのかも知れません」

「まあ、いいだろう。しかし、この間の話の直後だと言うことを忘れるな。融資拡大するか、引き上げるかの判断はまだ下されていない。だから、返事はするな」

「わかりました」

「それから、この間の下宿の世話だがどこにするんだ？」

「すみません、本人がやはり遠慮してまして……自分の親戚に頼んでしまったそうなんです。色々ご厄介をお掛けしました」

「そう、ならいいんだ。……そうか、飛行機の時代到来と言う感じだな」

課長はそうつぶやいた。

昼過ぎに銀行を出て山の手線で新宿に行き中央線に乗り換えて立川で降りた。日の丸商事は駅の近くで飛行場も間近にあった。飛行場には陸軍飛行第五連隊の記章の旗がたなびき、延々と続く一・五キロメートルの滑走路が伸びていた。

滑走路脇の倉庫に、大きなプロペラの付いた軍用機が停まっていた。

「川崎君、ここへ来たことはあるかい」

「いえ、現場は初めてです。日の丸商事を担当したのは前任者が退職した後なので、融資をはじめたころのことは知りません」

「そうかい。でも、あんなものが実際に空を飛ぶんだよ。大したものだよ」

「そうですね。でも、わたしは乗りたくありません」

「若いのにだらしがらないな。意外と安全らしいよ」

そう言っている信蔵の真上を、民間機らしく陸軍機と違う塗装の機体が通り過ぎた。大きく力強い音を立てて、みるみる高度を下げ、地面に付いた途端に速度を落とし、土埃を巻き上げてエンジン音を停止させた。

「あれ、プロペラが三枚もありますね」

「ほお、翼と胴体中央にエンジンとプロペラか」

——井上さんの言っていた、フォッカーという飛行機だ。と信蔵は思った。

しばらく飛行機を眺めた後、目的の日の丸商事に向かった。大きな商社と思っていたら、倉庫に事務所があるだけの小さな店だった。とは言っても、年商二十万円の売り上げを誇っている。だから銀行側からわざわざおもむいたのだった。

入り口はすぐに事務所になっていた。近くにいた職員に声を掛けるとすぐに社長が出て来た。五十くらい年齢の大柄な男だった。信蔵が名刺を出して挨拶すると、社長も名刺を出した。合資会社社長の肩書きで鈴木秀雄と書いてあった。

信蔵と川崎は鈴木に案内され、奥のついたて一枚で仕切られた部屋に通された。

「今日は遠いところをお越し下さりありがとうございます」

「いいえ、店や倉庫を見たところ繁盛なさっているようで、結構なことでございます」

「中央銀行さんの力添えのお陰ですよ」

「社長は、この飛行場が出来たときからここで商売をなさっていたんですか」

「いえ、元は横浜で普通の貿易をしていました。飛行機関係は五年ほど前のことです。欧米の製造会社から飛行機のエンジン部品の輸入を始めました。すぐに飛行機が有望なことがわかり、こちらに拠点を置いたんです。いずれは飛行機本体を扱いたいと思っています」

「ほお、飛行機ですか」

「陸軍機、民間機とも、これから需要は増える一方です」

「でも、輸入ばかりではなく国産も始まるのではないですか」

「どうでしょうか、研究熱心なのは確かですが、まだ、機体もエンジンも満足できる水準にありません。現にわずかな国産機も陸軍が外国から設計図を購入して製作させていますよ。純粋な国産など、何十年も先のことでしょう」

鈴木社長は井上が聞いたら怒りそうなことを口にした。

「わかりました。その需要ですが、現在の東京・大阪間の郵便路線にくわえて拡大されるのですか」

鈴木は言いたいけど言えないという顔になった。次に出す言葉を探していた。

「まだ正式決定ではないので……」

「東京・大阪、そして東京・大連の旅客運送計画ですね？」

「ご存じでしたか。まだ極秘ですよ」

「銀行の調査部も遊んでいるわけではありません」

「そうですか……実はその計画があり、実際に乗客と同じ重さのおもりを積んで航路の安全を確かめています。東京・大阪は毎日、東京・大連は週三便飛ばす計画で飛行機も

交換部品も大量に購入することになります。当社としてもその要望に応えるべく部品の手配をしたいのですが、現在の資本が少なすぎると言う相手側の指摘があり、増資計画を立てたのです」

「なるほど、確かに御社は売り上げの割に自己資本が少ないですね。まあ、合資会社だから資本は少なくても差し支えがないのでしょうか、代金を回収するまでは大部分が売掛金の状態になるわけです。取引先としては不安になるでしょうね」

「そこで、中央銀行さんが音頭を取って増資を引き受けてもらいたいのです」

「増資自体については、持ち帰り検討事項とさせていただきます。しかし、合資会社のままでの増資は難しいと思いますよ。いっそのこと、株式会社にしてはいかがです。その方が広く資金を集めることが出来ますよ」

鈴木は頭をかいた。

「すみません、この会社を人手に渡したくないのです」

「別に株式会社にしたら、社長が過半数株をお持ちになればいいじゃないですか」

「しかし、何かのはずみで市場に出た株を誰か知らない人に買い占められたのでは死んでも死にきれません」

「まあ、いいでしょう。この件は考えておきます」

信蔵が話を強引に切り上げて、出されたお茶に手をつけると、窓の外に、また別の飛行機が降りてくるのが見えた。

「旅客機って誰でも乗れるんですか？」

信蔵はふと、鈴木に聞いてみた。

「ええ、運賃さえ出せば……船と一緒にです」

——運賃のことは考えていなかった。

「ほお、東京・大連間はいくらくらいかご存じですか」

「それも、まだ極秘なんですけど、すぐ調べられそうですね。未定ですが百五十円から百八十円の間で計画しているそうです」

「ひゃくごじゅう！」

信蔵と川崎は同時に叫んだ。信蔵の月給は六十円だった。給料が吹っ飛ばすような乗り物だった。と同時に信蔵は屋根裏の前田を飛行機で大陸に逃すアイデアを捨ててしまった。

「しかし」

鈴木社長は続けた。

「でも、待って下さい。多少高くても商社や軍関係者など、早さを追求される方の需要は必ずあります。もし、……もし、ですが、ご検討いただけるなら、銀行の関係者の皆様で一度、飛行機に乗ってみませんか？ 不安があるなら大阪まででも……」

信蔵にとって思わぬ提案だった。もちろん、銀行幹部がそんなものに乗るはずがないから、若手行員に押しつけられるだろう。その際に、帝大の航空学科の学生だと言って井上の名前で前田を乗せてしまえば不都合はない。

いい話だったが、銀行がこの融資に前向きに取り組むことが前提だった。信蔵は神妙な面持ちで、試乗の件も慎重に検討すると答えて帰途に付いた。

銀行に帰り、課長に融資申し込みの報告をした。案の定の話だったので特に意見もなかった。経営方針会議の結果で全て決まってしまうのだ。

信蔵にはただ決定を待つしかなかった。それで他の行員が集金先から帰ってきて報告が上がってくるのを待って、その日は早めに帰宅した。

急いで本郷の自宅付近に差し掛かったとき、商店の前にある赤い背丈ほどの高さの郵便ポストの陰から、少女がこちらを見ているのに気付いた。

信蔵が気付くくらいだから、わざとこちらを威圧しているに違いなかった。人影の正体は松本梅子だった。

「君、どういづもりだい、わたしを待ち伏せ何かしたりして」

「前田さんのことでお話があるのです」

「だから、何度も言ったじゃないか。彼は失踪してしまったんだ。故郷に帰ったのか、それともどこか田舎町に移ってしまったのかそれすら解らない」

「でも……」

梅子はうつむいた。信蔵は今度はどんな攻撃を仕掛けてくるかと身構えた。もう完全に特高のスパイだと思いこんでいた。

「このままだと、前田さんはいずれ特高に捕まってしまう。前田さんが死んだらわたしも困るんです」

「ほお、お金でも貸していたのかい」

「そんなじゃありません。わたしのお腹に前田さんの子供がいるんです」

「はあ、そんな風には見えないがな」

そうは言ったものの、人によってはお腹が大きくなるのが目立たないし、帯のしめ方を工夫すれば臨月近くまで目立たなくすることも可能だ。しかし、前田と食堂の娘とでは結婚するには全く釣り合わない。帝大法学部の学生は即高級官僚なのだ。華族や金持ちの娘との縁談がすぐに舞い込んでくるだろう。

「君が妊娠しようが、それはわたしの口を出すことではない。しかし、わたしの知っている限り前田さんはそんなことをするような人ではない」

梅子はまたうつむいた。

そのまま梅子が何も言わないので、少し後ろめたさを感じながら信蔵は足早に立ち去った。道々、信蔵は自分が早めに帰宅するところを待ち伏せされたことから、特高の見張りも段々と厳しいものになっていくのを感じつつあった。それでも、平然と暮らしているのは、海軍将校と親しい井上を下宿人に行っていることと、銀行取引先に陸軍御用達の商店主がいることだった。特高に対抗できるのは、もはや天皇直轄の陸・海軍しかなかったのだ。

しかし、信蔵は不安になった。

自分自身の梅子に対する態度だ。本当に前田の居所を知らないのなら、梅子の攻撃に対しあたふたと慌てるのが自然ではないかと思い始めたのだ。彼女の同情を引くような誘導尋問をばっさりと切り捨てられるのは、前田が父の忍者屋敷の屋根裏の隠し部屋にいて絶対に安全だという確信を持っていればこそだったのだ。

だから、信蔵が自信満々に居所を知らないと主張すればするほど、逆に居所を知っていると相手に思わせることになり、段々と監視網が強まってきたのだ。そう考えると、二回目のきなこ餅を食べてしまえば良かったと、後悔した。

信蔵が家に帰り、ツネからお茶をもらおうと一息に飲み込んだ。少しむせかえったら、ツネが背中をさすった。

「お父さん、どうしたんですか。そんなに慌てて」

「いや、この間の女中に途中で出くわしたんだ。気が動揺してしまったのかも知れないな」

「もう、だから前田さんのこと心配だったんです」

「大丈夫だ。何とかするさ」

子供達はどこか近所に遊びに行っているらしく、家の中は静まりかえっていた。前田が脱出して井上が来年卒業してしまえば、下宿人は古柴と横井だけになる。家族四人と下宿人二人では少し寂しいほど大きな屋敷だった。

「井上さんに来年からの下宿人を誰か紹介してもらうかな、ツネはどう思う」

「そうですねえ、学生さんの世話をするのは楽しいけど……小さな家ならお父さんの月給でのんびり暮らせるんですよ」

「おいおい、おじいさんが聞いたらあの世で泣いてしまうじゃないか」

「そうですね」



## 7. エスケイプ



## 7. エスケイプ

ツネに手伝ってもらって背広から着物に着替えて、二階の書斎に入った。深呼吸してから、書棚をぐるりと回し、隠し廊下を通して屋根裏の隠し部屋に上がった。前田は文机で何やら書き物をしていた。

「大家さん、お帰りなさい」

「何か書き物ですか」

「ええ、ちょっと」

「前田さんに少し相談があるのですが、避難先の件です。東京から大連までの飛行機便に乗れるかも知れないんです。途中、大阪、福岡、京城、平壤を経由します。どこか途中で降りてもいいですし、大連まで行ってから満州か中国に行くのもいいかも知れません。どう思いますか」

「そうですねえ。でも、わたしが外地にいることが判明すると大家さんの関与が疑われませんかね、実家の納屋に隠れているのならわたしだけのことですむと思うんですが」

「どの道、監視はされています。ここまで来たのなら、最後までやるのみです」

前田はしばらく考え込んだ。外地に高飛びするのだ、誰だって不安だろうと信蔵は思ったが、前田は違うことを口にした。

「大家さん、特高がなぜわたしにあんな本のことで関わるのかご存じですか？」

「共産主義者の情報を持っているからと前におっしゃいましたよね」

「そうです。ですが、情報を持っていたってそれだけでは会社の名簿を持っているのと同じで何の使い道也没有ありません」

前田はそう前置きした。

「真の目的は、この名簿の中にソ連の日本におけるスパイ網がほぼ含まれていて、それを捕捉することにあるのです」

「ス、スパイ？ 日本の中にそんなものがあるのですか」

「ええ、それにちゃんと機能しています。ソビエト国家政治局、通称ゲーペーウーと呼ばれる組織で、国内の有識者や国会議員、新聞社、労働組合幹部などあらゆる階層の人に接しています。日本の艦隊がどう動くのか、満州駐留陸軍がどう動くのか、反共的政策をとるのか、経済政策はどうか、それらを常に監視しています」

「じゃあ、日本の社会革命党は何をしているんです」

「単なるコミンテルンの窓口です。このゲーペーウーの組織自体はソ連大使館を経由して新聞社を動かして世論を操作、有識者を動かして学生を共産主義に洗脳したりと、でも、元は日本がやったんですよ」

「何のことです」

「日露戦争の直後にロシア革命が起こったでしょう、亡命中のレーニンらに資金提供したのは日本軍工作員でした。つまり、猫に餌を与えて虎にしてしまったと言うわけです」

信蔵は言葉を失った。

確かに前田は危険人物だった。このまま外地に避難させることは売国的行為に思えた。

「ひとつだけ確認させて下さい」

「はい」

「前田さんは共産主義者なのですか」

「いいえ、共産主義国家の本質を見極め、長所と短所を押さえて、取り入れるべきは取り入れ、排除すべきは排除すべきと考えています」

「そうですか、わかりました。あなたを大連に避難させます。その代わりに、あなたの名簿を残しておいてもらいたいです。わたしの保身の為ではありません。国家のためです」

「大家さんのためになら残しましょう。しかし警察に提出するのは少し待って下さい」

「どういうことです」

「本来はソ連情報部の様に自分の力で摘発すべき事項です。諸外国には皆その様な機関を持っています。特高なんかでお茶を濁している現在、少しは訓練させないと為になりません」

前田は特高をかなり軽く見ていた。「現在の特高など弱いものいじめをしているだけで、本当のスパイは野放しに近いと考えているのです」

「わかりましたよ。でも情報なんかで政治が変わるのですか？ 信じられません」

「身近な例を挙げましょう。日露戦争で日本海軍とロシアのバルチック艦隊が海戦を行いましたよね。ロシアの戦力はあのとき、三分の一しか投入できなかったのです」

「三分の一？」

バルチック艦隊自体が日本の三倍の兵力ですでに圧倒されていると当時言われていたのだ。

「戦争当初の作戦で旅順港のロシア第二艦隊は封鎖されその後、陸軍の砲撃で壊滅しました。その後、黒海艦隊と第一艦隊、いわゆるバルチック艦隊ですが、出撃命令が出ました。しかし、イギリスとの秘密協定でオスマン・トルコ帝国がボスフォラス海峡を封鎖し、黒海艦隊は動けなくなりました。残った、第一艦隊は、イギリス海軍の牽制を受けて何度も足止めを食い、補給も妨害されました。日本はロシア側を迎えるのに対馬海峡か津軽海峡かで迷っていましたが、燃料に不安のあるロシア艦隊に取り最短経路の対馬海峡を通過するのは確実だったんです。それはイギリスも予想の範囲内で、日本側に通報したのです。日本が大勝するのは想定外のことだったでしょうが、最悪でもロシア艦隊に打撃を与えれば、それでイギリスにとっては十分だったのです」

「信じられません」

「講和会議でも日本の外交暗号がロシア側に漏れています。そうした丸裸の交渉を救ってくれたのもイギリスです。ロシアの暗号電報を日本側に通報してくれたのです。それで、

樺太だけいただくことになり、辛うじて戦勝の体裁を保てた」

「じゃあ、何ですか。全部イギリスの陰謀だと？」

「映画で言えば、脚本、監督、制作がイギリス人で弁士だけが日本人だった。そういうことです。情報力は政府をひっくり返すこともあるし、いかなる交渉にも負けることはありません」



## 8. 飛行計画





## 8. 飛行計画

次の週、井上が以前語っていた、大西洋横断飛行が新聞に大々的に報じられた。飛行成功から一週間遅れだった。アメリカ人の郵便飛行士であったリンドバーグ氏が昭和二年五月二十日ニューヨークを飛び立ち単独で大西洋を横断、翌二十一日パリ郊外に着陸した。五千八百キロを三十三時間かけての飛行だった。着陸時の感想は「誰か英語が話せるものはいないのか」だったという。

これ以前にも大西洋横断はあったが、単独飛行としては世界初の快挙だった。

この出来事で、銀行幹部達も前向きになり、飛行機関連産業への融資に積極的になり、また、日の丸商事からの接待である旅客機への搭乗も承認された。その結果、部長クラスと信蔵が乗り込むことになった。信蔵は下宿している航空学科の学生を乗せたいと懇望し、一人分許可された。

融資に関する実務手続きは、部下の川崎に任せ信蔵は報告だけ聞いていた。

この日、前田に出発の日時を伝えるために早めに帰ろうと家路を急いでいると、途中何人かの男に尾行されているのに気付いた。着物姿で股引をはいているが、何故か帽子を被っていた。荷物を持っていないので一目で商人ではないとわかる。

銀行からの大きな融資は大蔵省や内務省の知るところなので、完全に秘密ではなかったが、警察なんかには知られることはないはずだった。信蔵は尾行者の正体をさぐるべく、一旦四つ角を右に曲がった。商店街になっていて丁度散髪屋があったので入った。こんなところまで付いてこないだろうと思ったのと、週末に飛行機に乗るので綺麗にしておこうと思ったのだ。いつもの散髪屋ではないが、やり過ごすのに丁度良かった。

職人が髪を切っている間、信蔵は鏡で外の男を観察していた。しばらく、男は散髪屋の中を見張っていたが、商店街では買い物もしないのに長時間店の前に粘っていたら文句を言われる。そうして、一人、二人とその場を立ち去った。それを見て、尾行者が特高や警察の人間ではないと確信した。特高の人間が喫茶店のおばさんに追い払われたりしない。

そこまで頑張って尾行を振り切ったが、家の付近の道路で、松本梅子が待ちかまえていた。

「また、君か。食堂で働いていると言ったが、人のことをつけ回して仕事は大丈夫なのかね」

「はい、お気遣いなく」

「それで、今日は何の用です」

「どうしても前田さんと連絡を取りたいんです」

「何度も言いましたよ」

「でも、本当は無事であることはご存じですよ」

梅子は誘導尋問を掛けてきた。

「知りません、でも、殺されたなら新聞に載るでしょう」

「獄死や行方不明の場合は載りません。つまり知り得るのは凶漢に襲われた場合だけです。だから、あなたは前田さんの生存を知っている、違いますか渡辺さん」

そう言う梅子の目は少女のものではなかった。信蔵はある種の不愉快さを覚えつつあった。教師に悪事がばれて知っていながら白状させられる、あの記憶だ。

「彼は、特高の捜索前に失踪したんですよ。獄死の可能性はないでしょう。多分どこかで家庭教師でもしながら暮らしているのではないですかねえ、と思いますよ」

「前田さんは東京府内からは出ていません。だから特高も警視庁を使って捜索を続行しているのです。現に浜松の実家には駐在が一度訪問しただけです」

「何だって？ 君は一体何者なんだ」

「食堂の給仕です」

梅子はそう言ってにやりと笑みをこぼした。

信蔵は身の細る思いで家にたどり着いた。散髪やら尋問を受けたせいで六時をとうに過ぎていた。学生たちは食事をすませ議論に興じていたが、ツネと子供達は信蔵を待っていた。

「おかえりなさい。お父さん散髪に行ったんですか」

「ああ、週末に飛行機に乗るんだ。部長達の案内だから身だしなみに気をつけないといけないからな」

子供達は飛行機と聞いてうらやましがった。僕も乗りたい、と豊が言うと、ヨシコも同じように言い出した。

「遊びで乗るんじゃない。仕事だ」

そう言ってツネに食事を急がせた。

信蔵が着物に着替えて食卓に付くと、子供達も食事を始めたが、議論していた学生も興味津々の様子で信蔵に話しかけた。

「大家さん、飛行機ですか」

井上が嬉しそうに尋ねた。

「はい、井上さんが前におっしゃっていた、東京・大連航路の試験飛行に誘われました。もっとも、銀行から融資を受ける前に飛行機を見せびらかそうと言う意図は見え見えなんですけどね。井上さんはお乗りになったことは？」

「海軍の練習機に乗せてもらったことがあります」

「へえ、軍用機ですか、やはり民間機とは違うんですか」

「設計からして違います。とは言っても民間機には乗ったことがないんです」

「設計というと、例えば」

「軍用機は急旋回や急降下を行うので、強度が高いんです。それから、戦闘機だと機関銃も装備されています。回るプロペラの間から機関銃を発射するんです。すごいでしょ」

「プロペラにあたりしないんですか」

「最初の頃は、自分のプロペラを破壊して墜落したこともあったようですが、今は、エンジンの回転をカムでタイミングを取り機関銃の発射と同期させているんです」

「へえ」

返事はしたものの信蔵はエンジンの構造もカムも知らなかった。ただ、機関銃の動作とプロペラの回転が同期していることだけ理解できた。

「未確定の情報なんですけど、運賃がすごく高いんですよ。こんな乗り物に将来性はあるんでしょうか」

「ああ、確かに高いと思いますよ、一回飛行するごとにエンジンや昇降舵、方向舵の点検、パッキンなどの部品交換、燃料代、飛行士の給料、それらを考えるとかなり高い買い物です。しかし、効果を考えてください。かつての二〇三高地での要塞の突破も簡単に行えますし、一週間以上掛かる中国への移動も一日半ですむのです。商社や軍人なら大いに活用するでしょう。それに、今の機体は七、八人が限度ですが、今に数十人乗れるものができます。そうすると一気に安くなります」

井上も鈴木社長と同じことを言った。

「飛行機はそんなに発達するのですか？」

「今は、日進月歩、いや、秒進分歩です。半世紀後には船で出張する人などいなくなりますよ」

「そんなに進歩が激しいのですか？」

「ええ、明治三十六年十二月十七日、今から二十五年前です。アメリカ・ノースカロライナ州のキティホークという町で、ウィルバー・ライトとオーヴィル・ライトという兄弟がライトフライヤー号という飛行機で初めて、いいですか、初めて飛んだんです」

井上は力説した。

「この飛行はほんのわずかな距離を浮かんだだけでしたが、当時、熱機関を利用した機械が空を飛ぶことは科学的に不可能と言われていた常識を壊したのです。その後、たった、二十五年でアメリカからパリまでの飛行が可能になったのです。日進月歩どころではないのです」

「ほお」

信蔵は何だか飛行機に乗るのが楽しみになってきた。

今回は航路の試運転でもあり相手の接待で乗せて貰えるが、百五十円の運賃は自分では高すぎると思った。行ったはいいが、また帰ってこなければならぬ。それを考えると三百円なのだ。

値段はさておき、前田を飛行機に乗せるのにあたって立川基地まで人に見られないように、飛行機までたどり着かなければならぬ。家を出た直後から尾行が付くはずだった。

「大家さんどうしたんです、深刻な顔をして」

「ああ、いえ、立川基地までの道順を考えていたんです。部長達と一緒にだから電車に乗るのも何ですし」

「あれ、銀行のえらい人は自動車ではないんですか」

信蔵もすっかり忘れていた。自分自身乗ったことがないからぴんと来なかった。確かに部長以上は自動車を使っているし、頭取は運転手つきの自家用車を持っていた。お金はかかるが飛行機ほどではないし、当日は自動車に乗ることにした。前田は変装して別の場所から乗り込んでもらおうと思った。

食事あまりのどを通らなかったが、夜、子供が寝静まるのを待って書斎から屋根裏部屋に上がった。前田に手順を整えさせておかなければならないからだ。襖を開けると居眠りしていた。信蔵の気配を感じて、むくっと起き上がった。

「お休みのところすみません。飛行機の日程が決まりました」

「そうですか、何から何まですみません」

「ですが、向こうではどうします？」

「そうですね、大連から鉄道で満州に向かおうと思います。機会を伺ってソ連にも行ってみたいですし」

「わかりました。当日は航空学科の井上さんとして振る舞って、現地で急な腹痛で病院に入り船便で後から帰ることにしましょう。それから、この家からの脱出なのですが、いい方法がありません。それで……この屋敷から裏の古井戸に抜ける通路があるんです。そこから、裏通りに出て、わたしが表から自動車で出発するのでそこで乗り込んでもらいたいです」

「なるほど」

「飛行機に乗るにあたって、背広はお持ちですか？」

「いえ」

「では、わたしので入りますかね、その裏地に井上の名前をツネに刺繍させます。機内では井上と名乗ってください。飛行機の専門家なので話を適当に合わせて下さい」

「それは難しそうですね」

話の後で、信蔵は屋根裏部屋に通じる階段の反対側に、回転式の扉があり、はしごで地下に通じていると、実物で説明した。

「この下は、一階の床下を一段掘り下げた階につながっています。そのまま横に進むと、裏の古井戸の途中に出ます。井戸は枯れていて、石も野積みなので上がるのは難しくありません。上に掛かっている網は前の日に外しておきます。前田さんはそのまま裏の林を抜けて通りに出て下さい」

前田は神妙な表情で説明を聞いた。

「色々すみません、大家さんがいなかったら命を落としていたかも知れませんね」

そう言って頭を下げた。

「よして下さいよ、みんな誰かの世話になったりの繰り返しです。わたしもそのお返しのためです。前田さんも将来、誰かを助ける機会があったら助けてあげればいいんですよ」

前田は少し涙ぐんでいたが、後で、封筒を渡された。彼の交際者の名簿が入っていた。大学教授から政治家、新聞記者、労働組合幹部、……あらゆる階層の人物が名を連ねて

いた。全部が全部スパイ活動をしているわけではないが、親ソ連的態度という程度から、実際に活動している人間まで細かく備考欄に記載されていた。確かに特高が目をつけるだけのことはしていたのだ。

信蔵は名簿を自分の書斎の隠し戸棚に入れておいた。前田の無事だけ確かめて、その後警察でも特高でも届けられればいいと、このときは思っていた。

週末、朝七時に銀行から頼んでくれた乗用車が、信蔵宅に迎えに来た。部長達より少し小さめの車種だと聞いていたが、初めて乗る乗用車はやはり立派に見えた。車体後部にクライスラーと英文のマークが入っていることだけ読み取れた。

「じゃあ、これから行ってくる、学生さんのことは頼んだよ」

「はい、四人ともしっかりと」

ツネは信蔵にしかわからないように気をつけて喋った。四人とは屋根裏の前田も含めた人数だった。隠し扉がわからずにこの自動車に間に合わなければ非常事態になってしまう。ツネは信蔵が乗り込むのを見届けずに、家の中に入った。

信蔵が運転手に発進するよう言った。

「すみません、その裏通りを通ってください。学生さんと待ち合わせしているんです」

「かしこまりました」



## 9. 尾行





## 9. 尾行

角を曲がり、運転手はそこで停車し、右手でブレーキレバーをぐいと引いた。信蔵は自動車にも興味津々であったが、前田のことが気がかりで中々現れないのに気を揉んだ。隠し扉がわからないのか、あるいはハシゴで手間取っているのか、はたまた、古井戸を上れずにいるのか……。

しばらくすると林の中から前田が現れたが、案の定背広の膝がすすだらけだった。横穴で苦勞したと見えて信蔵は笑いがこみ上げた。

窓から顔を出し、思わず名前を呼びそうになりぐっところえた。

「いのうえ、さん。こっちです」

今から大連に着くまでは井上と呼ばなければならぬ。運転手が後部ドアを開けて前田を招き入れた。

「すみません、手間取ってしまって」

「いいですよ、誰だって急な出張となれば用意が大変ですよ」

信蔵は辺りを見渡し、怪しい男や、松本梅子がいなか気配り、それを確かめてから自動車を発進させた。一旦自動車が走り出せば、岡っ引きのようなスパイなど追いつくはずもなく、行き先が立川飛行場とわかっても彼らが来る頃にはすでに飛行機は飛び立っているはず、だった。

車内では無駄な会話は一切しなかった。

クライスラーは淡々と走り続けた。東京市内の道はほとんど未舗装だったが、よく整備はされていて、大きなクライスラーのサスペンションは路面の凹凸を快適に吸収していた。やがて市外に出た辺りで、道路の陥没や水たまりが目立つようになり、揺られつつ車外の風景を眺めていた。

ふと、信蔵は気になった。

「運転手さん、この辺りには自動車は多いんですか」

「いいえ、自動車の数がそんなに多くないので……この辺では滅多に出会うことはないですねえ」

「後ろに二台付いてきているじゃないですか」

「はい、ここは中央本線沿いの五日市街道ですが、高円寺、いや、新宿あたりからついてきましたね、行き先が同じじゃないんですか？」

「君の会社の自動車ではないのかね」

「いいえ、違いますよ」

それならば、不自然だった。部長達は別々に、しかも、信蔵より一時間遅れで飛行場に到着予定だったし、この時間帯にそろって同じ道を走るなど考えにくかった。だが、新

宿には陸軍大学校など諸機関が集中している。その幹部将校が自動車で立川基地に向かうことは不自然ではなかった。

信蔵は前田の顔を見た。心なしか緊張していた。

「運転手さん次のところを脇に入って停めてください」

「ええ、狭いですよ」

「狭い方がいいのです」

信蔵は強引に路地に入らせた。

後続車を見ると一緒に曲がってきた。やはり、つけられていたと悟った。

「運転手さん、この道を飛ばして振り切れないですか」

「しかし……相手は何者ですか？」

前田が口を開いた。

「渡辺さん、無理はしない方がいいです」

「でも……」

後続車の一台から着物を着た小柄な人影がひとつ降りてきた。そして、そのままクライスラーに近づき、窓をノックした。信蔵が窓を開けると、顔を見せた。松本梅子だった。「やはり、特高のスパイだったのか？」

梅子は首を横に振った。懐から赤いカードを見せた。写真が貼ってあり英語ではないアルファベットで文字が書いてあった。前田が読み取った。

「ソビエト国家政治局（ゲーペーウー）、マリナ・ベリコワ」

信蔵は驚いた。特高のスパイと思っていたら、ソ連のスパイ組織のメンバーだった。

「君、日本人じゃなかったのか」

「はい、両親の生まれはウラジオストックですが、函館で商売をしていたんです。革命時に共産党に入りました。だから、日本の習慣には通じています」

「驚いたね、では、どうして特高の稲垣とか言う捜査官に協力なんかしたんだい」

「協力じゃありません。時間がなくて手短かに説明します。特高がわたしの監視していた前田さんを逮捕しようとしたので、政治局本部からこちらで保護するか、もしくは……と言う命令を受けていたんです。この先、立川基地周辺にも特高が張り込んでいます。だから、その寸前でとめる予定でした。どちらを選ぶかは前田さんにお任せします」

信蔵は前田の顔を見た。

「渡辺さん、わたしが彼らと行けばいいでしょう。丸く収まります」

「でも命の保証がないですよ」

「大丈夫ですよ、彼らはわたしに手出しは出来ません」

前田はそう言って片眼をつぶった。

信蔵はとっさに意味がわかりかねたが、あの名簿を思い出した。前田がソ連に引き渡された後、名簿をどこかに隠したと言えば、彼らは前田に手出しは出来ないし、その逆に、信蔵もあの名簿を警察などに出せば前田の命が危うくなる。これで、ソ連も信蔵に手は出せなくなる。そう言うことだった。三方一両損の解決であると同時にそれぞれが

弱みを持つ羽目になってしまう。信蔵は梅子に聞いた。――

「おい、前田さんをこれからどうするんだ」

「多分、函館からウラジオストックに移動し、列車でモスクワまでお運びすることになると思います」

「我々はどうなるんだ？」

「わたしと会わなかった、そう言うことにして貰えるなら手出しはしません」

「ふん、信用できるのか」

「そちらが信用すれば、こちらも信用する。それだけの話です」

信蔵が黙っていると、前田は自分で荷物を取り、信蔵に深々と頭を下げた。

「じゃあ、元気でな。寒いだろうから風邪引くなよ」

それ以外に掛ける言葉が見付からなかった。

前田は梅子達の自動車に乗り、バックで道路に戻り反対方向に走り去った。

土埃だけがやたらと宙を舞い、朝日に照らされた。

信蔵は気が抜けてしまったが、これから、飛行場に向かわなければならなかった。元々失踪扱いだった前田が本当に失踪する場面に立ち会ったわけだった。天気は良かったが、信蔵の気は晴れなかった。

運転手のことが気になり目をやるとおびえているだけで、相手の正体にも気付いていないようだった。信蔵は立川基地で降りる際に、同乗の学生は特高に連れ去られたとだけ言っておいた。その方が説明が楽だったのだ。

時間になり部長達を案内して憧れだった飛行機に乗り込み、片道三十時間の旅を楽しんだ。とは言え、全員が飛行機に酔ってしまい信蔵はその介護に追われた。散々な思いで五日後に帰宅した。

学生達は普段と変わりなかったが、屋根裏の下宿人がいなくなったことで、信蔵とツネだけが少し寂しくなった。書斎の書棚から隠し廊下を通して前田のいた屋根裏部屋に入ると、布団がきれいにたたんであり床も雑巾が掛けられていた。

――立つ鳥跡を濁さず、か。

信蔵は感慨深げに文机の引き出しを開けると、信蔵に宛てた手紙が入っていた。

匿ってくれた礼と、とっさの搜索にもかかわらず素早く対応した信蔵の手際の良さを誉めてあった。信蔵が照れながら読んでいくと最後に、日本の将来を憂いてあった。

――捜査当局が自分（前田）を狙ったのはある意味正解に近かったが、見当違いも甚だしい。貧弱な情報力で物量に頼るのは日本人の悪い癖だと言える。この状態のまま英米と対決するのは心許ないこと甚だしいと思う。自分はしばらく外国にて情報力の何たる

かを研究したいと思う。散々世話になって最後に雲隠れに近いお別れをするのは不本意であるが、また、日本に帰る日が来たら一番に大家さんに会いに行きます。前田吾郎

信蔵はその手紙も、あの名簿と一緒に隠しておいた。 了



---

屋根裏部屋の哲学者

---

著 黒川文

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---